
ラフメイク・スニーカー

小和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラフメイク・スニーカー

【Nコード】

N1764D

【作者名】

小和

【あらすじ】

理系進学クラスの高校二年生・遼平^{りょうへい}は毎日繰り返される単調で平凡で退屈な日常に何か物足りないものを感じていた。ある金曜日、遼平が一人で校舎裏のベンチに向かうと、そこには小学生のときから付き合いのある誠^{まこと}がいた。久し振りに会った誠が中学生のときからずっと履いている白いスニーカーに、遼平は不思議なものを感じて……。

第1話「懐かしのスニーカー」

「ここは理系クラスだろうが・・・」

黒板に今月末までに提出、と書かれた宿題の内容を見て中谷遼平は
呟いた。

L a u g h m a k e s n e a k e r

「さすが小林だな。理系クラスにも容赦ない国語の宿題。ま、適当
にやっとけばいいな」

隣の席の大西がポツリと呟いた言葉を聞いて、遼平は溜め息をひと
つこぼした。

2

「お前ら、ちゃんとやってこいよー。じゃあ、今日はここまで」

日直の合図で起立をして礼をする。

それと同時にいつもと同じメロディのチャイムが鳴る。

教室のドアが開く音と共に、騒ぎ出す生徒の声。

繰り返される単調で平凡で退屈な日常。

「書けねえよ・・・」 未来の自分の子どもに宛てた手紙”なんてよ・
・・・」

そう言って、今度はさつきよりも深い溜め息をこぼし、遼平は机の上に倒れこんだ。

毎日同じ時間に起きて、同じ電車に乗る。

毎日同じ人に会って、毎日同じ人たちと勉強する。

決まった時間割、決められた席、決められた服装。

そんな縛られたものになんの抵抗もなくなってきた17の秋。

自分で言うのもなんだが、昔から神経質で真面目な性格だった。

親に逆らうなんてこともなかったし、勉強しなくて困らせたこともなかった。

そんなつまらない人生を歩んできた俺には、どうせ大した未来なんて待っちゃいない。

＊

帰りのHRが終わると、早く帰りたい一心で真っ直ぐ駅に向かう。

しかし、それが金曜だけは違った。

校門の近くにある自動販売機で缶ジュースを一本買い、校舎の裏にある古びたベンチで寝転んで、

だんだん暗くなっていく空を見上げながら、考えてもどうしようもないことを永遠と考えることが楽しみだった。

そんないつもの金曜日。

缶ジュースを手にし、いつものベンチに向かうと見覚えのある姿が目に残った。

カバンの上に頭を乗せ、無防備に寝転ぶ少年。
日よけのために顔の上に置かれた娯楽雑誌。
ボロボロになった白いスニーカー。

「もしかして・・・誠か？」

9割方そうだとは思えど、残り1割に疑いを含ませつつ遼平はベンチの上で寝転ぶ少年の名を呼んだ。

その声に少年は無言のまま右手で雑誌を振り払い、むくつと起きてまだ眠たそうな細い目をして遼平を凝視した。

「おお、遼平じゃねえか」

その言葉と同時に彼の目が大きく開かれた。

「お前こんなとこで何してんだよ」

「いやーいいとこ見つけちゃったな、と思っただけさ」

右手で髪をかきながら屈託のない笑顔で誠は言った。

誠とは小学校五年生のときから高校一年生まで見事にクラスが同じだった。

その縁で、よく一緒に遊んだり下らないことを話したりしていた。

「元気でやってんのかよ。理系クラスなんて俺には別世界だからよく分かんねえよ」

「別に普通のクラスと変わんねえよ。宿題写させてとか言う奴はめったにいないけどな」

遼平は缶ジュースの蓋を開けながら、誠の横に座った。

「そうなんだよなーお前がいないから、いま自分で必死に宿題やってんだよ」

「成長したな」

「まあな、僕も人間ですから。成長ぐらいますよ」

その誠の言葉に遼平は笑い、缶ジュースを一気に飲み干した。

「曇ってきたなあ・・・」

誠は空を見上げ、溜め息をこぼした。

「ほんと、曇ってきたなあ・・・」

遼平はそう呟くと掛けていた眼鏡を外し、カバンから取り出した布でレンズを拭き始めた。

そんな遼平の様子を眺めていた誠がぼつりと呟く。

「遼平、お前まだコンタクトにしてなかったんだ」

その言葉を聞いた瞬間、遼平は高校入学前に言った誠の言葉を思い出し、レンズを拭く動きが止まった。

「何言っただよ！俺が高校入って眼鏡辞めようとしたとき、顔のパーツがひとつ足りなくなっただけだから辞めてくれ！って言ったのお前だろ？」

「そうだったか？」

「そうだよ、お前が止めたんだよ」

あっけらかんとしている誠の態度に、遼平の口調が自然と強くなる。

「まあまあ、そんなムキになるなよ。あーこのスニーカーそろそろ穴開いて来たなあ・・・」

「お前、話逸らすなよ！」

「別に逸らしたわけじゃねえって、あーどうしようかなーこのスニーカー」

すっかりスニーカーに夢中になっている誠の姿に遼平は本日三度目の溜め息をこぼした。

「そのスニーカーいい加減履くのをあきらめろよ、中二ぐらいからずっと履いてるじゃん」

誠の履いているボロボロのスニーカーを見ながら遼平は言った。

「いや、これはダメだ。男と男の約束がいっぱい詰まったスニーカーだからな」

誠は今にも切れそうなスニーカーの紐をほどき、さっきよりもきつく締め直した。

「あつ、そ。そんだけ使われたらそのスニーカーも嬉しいだろうよ」
遼平は飲み終えた缶をベンチから1 m程離れたゴミ箱に向かって投げ入れた。

＊

二人の目の前にある緑のネットの向こうには、田んぼと緩やかに流れる川が見える。

「俺も流れてえな・・・」

遼平は川よりももっと遠い何かを見つめながら呟いた。

「え、お前正気か！？死ぬのか？」
誠が驚いた様子で遼平に尋ねる。

「ちげえよ。流れたら嫌でも前に進めるだろうが。そういうことだよ」

その遼平の言葉に誠は首をかしげ、困惑した表情を浮かべる。

「ま、お前には分かんない・・・」
「つまり、自分で前に進むのはもう疲れたから誰かに背中を押されたいってことか？」
その誠の言葉に、遼平の口の動きが止まった。

「あれ？もしもーし」

誠が遼平の顔の前で手を上下させる。

「お前、いつからそんな理解力早くなったんだよ・・・」

「おいおい、ひどいな遼平くん。僕だって人間なもの。そりゃ成長しますよ」

誠は遼平の背中を勢いよく叩き、遼平はすぐさま苦痛の表情を浮かべた。

「いてえよ、お前昔から無駄に力だけは強いんだから加減しろ！」

「あはは、バカの馬鹿力ってな！」

「ホントだよ、バカのば・・・」

ふと、さっき缶を投げ入れたゴミ箱の辺りから感じた視線の主に思わず遼平は固まった。

そこには、やっと1mになったぐらいの青いオーバーオールを着た5歳ぐらいの男の子が立っていた。

「おいおい、どうし・・・あ、え、誰？遼平の弟？」

誠の言葉に遼平は大きく首を横に振った。

「あのね、お兄ちゃんたち、お姉ちゃんを笑わせるためにはどうしたらいいの？」

舌足らずな喋り方で、男の子は遼平たちに向かって一生懸命話す。その突然の言葉に、遼平も誠も困惑した。

「お姉ちゃんを笑わす・・・いや、そんな急に言われても・・・なあ、誠」

「んーそれは難しいな。俺たちは芸人じゃないし・・・けど・・・」
「けど？」

「笑わせてやろうじゃないか、君の姉ちゃん」

未だに事態を飲み込めていない遼平をよそに誠は男の子の元へ駆け寄り、頭の上に右手をポンと置いた。

そんな誠の様子を眺めなら、遼平は”そうだ、こいつは昔から調子のいい奴だった”と思い出し、面倒なことに巻き込まれたと、また溜め息を吐いた。

予期していないことは常にセットでやってくる。

心は面倒なことになって巻き込まれたくないと嘆いてるのに、久しぶりに会った友人の古びたスニーカーがやけに懐かしくて、俺はなんだか笑えてきた。

> 続く

第2話「小さなスニーカー」

「おいおい、姉ちゃん連れて来いって言ったよな？」

翌日の土曜午前10時に俺と誠、男の子の三人はまた同じ場所に集まった。

誠は昨日の帰り、男の子にお姉ちゃんを連れて来い、と告げた。しかし、結局この場所に男の子が連れて来たのは身長20cmぐらいの首にピンクのリボンをつけたクマのぬいぐるみだった。

「だから、これお姉ちゃんだよ」

男の子は背伸びをし、クマのぬいぐるみを誠の目の前に突き出す。

「いや、それはぬいぐるみ……いや、そうだよな、それ、お姉ちゃんだよな」

そう言いながら俺の方をちらちらと見る誠の目は明らかに助けを求めている目だ。

そんな誠に俺は先手を打つことにした。

「俺は知らねえよ、お前が勝手に引き受けたんだから。だけど、まさか姉ちゃんが人間じゃないなんて思わなかったなあー。頑張っ
ね、誠くん」

俺はそう言い切り、チャックが開きっぱなしの誠の通学鞆の中から
漫画を取り出し読み始めた。

誠はそんな俺をじろつと睨みつけたあと、男の子と目線を合わせる
ようにしゃがみこんだ。

「で、どうしてこれは姉ちゃんなんだー？兄ちゃんでもいいだろ？」
誠は男の子の持っているクマのぬいぐるみをじろじろと観察してい
る。

「ピンクだから」

「え？」

「首につけてるリボン、ピンク色だから。ピンクは女の子の色でし
よ？」

「ふーん……そうか、そういうことな」
幼稚園児特有の発想だな、と思いながらも誠は首を縦に振り納得した。

「お兄ちゃんは、あっちのお兄ちゃんのお友達？」

男の子は目の前にいる誠を少し避け、ベンチに座り漫画を読むことに没頭している遼平を見ながら言った。

「ん？ そうだけど……」

誠は不思議そうに答える。

「よかった、あっちのお兄ちゃん、いつも一人だから」

「一人？」

「うん、金曜にここ来るとね、あっちのお兄ちゃんいつもここにいる」

「どうせベンチの上で漫画読んでるんだろ、あっちのお兄ちゃん」

「ううん、いつもお空見てるよ」

その言葉に誠はふと立ち上がり、振り返って遼平を見た。

そこにはさっきまで漫画に集中していた遼平がぼんやりと空を眺めている姿があった。

「おい、遼平」

「……………なんだよ、いますっげーいいところだったのに」
遼平は鬱陶しそうな顔をしながら言う。

「嘘つくなよ。空じーつと見て、漫画なんて読んでねえじゃねえか。
そんな空ばっか見てると水色メガネになんぞ」

「俺はトンボじゃないんでご心配なく」
誠はそう言ってまた漫画を読み始めた。

「ほんとまあ……………可愛くないお兄ちゃんだな」
誠が溜め息を溢しながら呟く。

「だけどお兄ちゃんより頭良さそうだね」
男の子は自分の二倍以上の高さはある誠を精一杯見上げながら笑った。

「なんか腹立つけど……………お前はカンがいい奴だ」
誠は男の子の頭の上に右手をポンと乗せ、笑った。

＊

「で、どうしようか、遼平くん」

遼平が漫画を半分近く読み終えた頃、ふと横を見るとクマのぬいぐるみを持った誠がベンチに腰を下ろしていた。

男の子は空気の抜けたボロボロのサッカーボールで一人遊んでいる。

「どうしようか、って俺は関係ないっての」

「何の関係ないだよ、ここまで来といてそりゃねえよ」

「お前があまりにも可哀想だと思ってお情けで来ただけ、っていうかお前クマのぬいぐるみ持つな、気持ち悪い」

「気持ち悪いとか言うなよ、それだったら空ばっか見てるお前のが気持ち悪いから」

「うるせえよ、だいたいクマのぬいぐるみなんて笑わせられるわけ・
・・・・」

男の子が無邪気に遊ぶ姿が目に入った遼平は、それ以上言うのをやめた。

「あー、ほんとにどうしょ」

誠は溜め息を吐きながら肩を落とした。

「ほんとにどうすんだよ、お前」

遼平は漫画を閉じて誠の鞆の中にもどし、横目で誠を見た。

「よし、俺、決めた！」

「お、どうすんの」

クマのぬいぐるみをベンチに置き、勢いよく立ち上がった誠を遼平は期待の眼差しで見上げた。

「俺、俺・・・・・・・・自動販売機で缶コーヒー買ってくる」

そう言って走り出した誠の後ろ姿に遼平は大きな溜め息を溢した。
期待を裏切る男、それが誠という男である。

＊

「お兄ちゃん、ぼくお腹空いた。お家帰る」

誠がベンチ置いていったクマのぬいぐるみを持ち、男の子は言った。さっきまで遊んでいたサッカーボールは廃棄場に置いてあったボロボロのカゴの中にきちんとしまわれていた。

「そっか……もうお昼だもんな」

遼平はポケットの中から携帯を取り出し、時間を確認した。待ち受け画面の右上には11・23と表示されている。

「あのお兄ちゃんにバイバイって言っておいてえ」

男の子はバイバイ、という言葉と共に右手でクマの手を左右に動かした。

「うん。あ、それからさ……君のお姉ちゃんんだけど……」

遼平は眼鏡のフレームを触りながら、深刻そうな顔をして話し始めた。

男の子は遼平の横に座り、クマのぬいぐるみを動かし遊んでいる。

「あのお兄ちゃんは力不足でさ……笑わすことはできないみたいなんだ」

遼平は唇を一回噛み締めたあと、男の子の顔を覗き込んだ。

「うん、知ってるよ」

「えっ？」

予想もしなかった男の子の言葉に遼平から驚きの声がこぼれる。

「分かってたよ、だってこれぬいぐるみだもん。しゃべらないし、笑わないよ」

「えっ……知ってたの？」

「うん。お兄ちゃん、いつも一人でつまんなそうにしてたから遊びに来たの」

男の子は小さな歯を見せながら笑った。

「……そっか、そういうことだったのか」

遼平は安心する気持ちと同時に、こんな小さな子から心配されていた自分に溜め息を溢した。

「お兄ちゃん、ぼくね、リレーのアンカーになったの」
男の子は立ち上がり遼平の前に立った。

「おお、すげえじゃん」

「だからね、おかあさんにね、新しいクツ買ってもらったの」
男の子は右足を精一杯上げて、遼平に自分の履いている新しいクツを見せようとする。

遼平は屈みこみ、男の子の足元を見た。

そのクツは濃い青色をしていて、白い紐が付いただけのシンプルなスニーカーだった。

「へえーかっこいいスニーカーじゃん」

「・・・・・・ニイカー？」

「あ、スニーカーってのは・・・・・・クツの種類っていうかなんてえか・・・・・・ま、とにかくカッコイイよ！」

「えへへ、かっこいいでしょ」

男の子はそう言って右手でVサインを作り、満面の笑みで遼平を見

上げた。

それにつられるようにして思わず遼平も笑った。

「じゃ、ぼく帰る」

「おうっ、アンカーなんだからケガすんなよ！」

「うん、また遊んでねえ！」

遼平はベンチから立ち上がり、男の子の姿が見えなくなるまで手を振った。

＊

「あれ、帰っちゃったの？」

いつの間にか後ろにいた誠がわざと遼平の耳元で大きな声を出し言った。

遼平は耳を押さえ、苦痛の表情を浮かべる。

誠の右手には男の子のために買ってきたらしき缶ジュースが、左手には缶コーヒ―が握られていた。

「ほい、あげる」

誠は右手にあった缶ジュースを遼平の腕に押し付け、遼平も反射的にそれを受け取った。

「・・・サイダーかよ」

「文句あんのか？おごってるんだから感謝しろ」

誠はそう言いながらベンチに座った。遼平も黙ってその横に腰を下ろす。

「あの男の子、自分の姉ちゃんがぬいぐるみだとか全部分かったぞ」

遼平はサイダーの蓋を開け、一気に半分ぐらゐまで飲み干した。

誠はその言葉に一瞬固まったが、「俺ら、からかわれてたのか」と呟き、笑った。

「俺がいつも一人でいたから遊びに来てくれたんだってさ」

「へー」

「俺のできなかったリレーのアンカーやるんだってさ」

「へー」

「……お前、ちゃんと聞いてんのか？」

遼平は疑いの眼差しで誠を睨みつけた。

誠は「聞いてますよー」と呟きながら空を見上げている。

誠のいつもの癖だった。

人がどんなに真剣に誠に向かって話をしても、聞いていないような素振りを見せる。

まるでどこか違う世界を見ているかのように。

小学生のときから馬鹿みたいに一緒にいたけれど、俺は未だに誠のことがよく分かっていないのかも知れない。

遼平はサイダーを飲み終え、昨日と同じように缶をゴミ箱に向かって投げ入れた。

それと同時に誠がすくっと立ち上がり、ためらいの表情を浮かべながら遼平の前に立つ。

「遼平くん・・・・・・・・実は・・・・・・・・」

「なんだよ・・・・・・・・」

やけに改まった態度の誠に遼平の表情が強ばる。

「遼平くん、僕はお腹が空きました。家に帰ります」

遼平はその誠の言葉に思わず口を開け、啞然とした。

誠はカバンを手に取り、右手を大きく伸ばして左右に振ったあと、勢いよく走り出した。

人はときどき誰かを勇気づけたくなるときがある。
あの男の子はどうやら俺にそれを感じてくれたらしい。

今日こそ、あそこまで白いスニーカーを履き続けている理由を聞こうとしたけど、
あいつの走っていく後ろ姿を見たら、そんなことどうでもよくなつて、俺はなんだか笑えてきた。

第3話「ラフメイク・スニーカー」

「ただい……………」

いつものように家の玄関の扉を開けると、靴箱からすべての靴を取り出してしゃがみこみ、

靴箱の奥を雑巾で拭いている兄の姿があった。

「なにしてんだよ」

「なについて見りゃ分かるだろ、大掃除」

そうやって、つままない返事をしてくる兄貴は今年二十歳になった。

高校のときのジャージに分厚い灰色のトレーナー、髪の毛は絵に描いたようなひどいぼさぼさ加減だ。

そんな兄貴がもう二十歳なのかと思うと俺はなんだか悲しくなってくる。

男二人兄弟。兄貴と俺は残念なぐらい性格がそっくりで、顔も残念なぐらいそっくりだ。

兄貴は、この時期になると親に決められた玄関の大掃除担当という役割を毎年ちゃんと律儀にやっている。

親に逆らってる兄貴なんて見たことがないし、ちゃんとした兄弟ケンカをした覚えもない。

そんなつまらない兄弟だ。

「なんで今日なんだよ」

「嫌なことは早く終わらす」

「まだいいだろ。早すぎるんじゃない？」

「……………ま、俺はお前と違って真面目だからね」

靴箱を拭く動きを止めて、わざわざ俺の方を向いて言ったその言葉に溜め息を吐きつつも、

なんとなく俺は兄貴の後ろにある小さな靴箱の上に座った。

この靴箱は大人が座るのにちょうどいい高さで、死んだひいじいちゃんも必ずここに座って靴を履いていた。

「そういや、俺のスニーカーは？」

ふと頭に浮かんだ疑問を俺とそっくりな兄貴の後姿にぶつけてみる。振り返って俺の方を見た兄貴はいかにもめんどくさそうな顔をしていた。

「俺のスニーカーだよ。ほら、中学のとき運動会の一ヶ月前ぐらいに買ってもらったやつ」

「あーこのスニーカーは軽くて走るには最高だとか店員がやたら長い説明してたスニーカーのことか」

こんな風にどうでもいいことをずっと覚えているのは親父にそっくりだ。

「そんなのどうでもいいんだよ、あのスニーカーは捨てたのか、って聞いてんの」

兄貴は俺の言い方が勘に触ったのか、少し苛立った口調で語り始めた。

「ああ、捨てたよ。お前がスニーカー買った翌日ぐらいに大ケガだか中ケガだかしてリレーのアンカーできなくなって、こんなスニーカーいるか！とか大泣きしてさ。そりゃ家族中大騒ぎの大迷惑だったよ。それで”男がめそめそすんじゃねえ！そんなに嫌だったら捨ててやる！”ってひいじいちゃんが怒ってさ。ひいじいちゃんに頼まれた俺が結局”もったいねー”って思いつつも捨ててきたんだよ・
・・・・って、おい！遼平聞いてんのかよ！」

昔からどうも兄貴の長い話を聞くのが嫌いだった俺は、靴の山を崩しながら家の中に入った。

「はいはい、聞いてました、聞いてました。その節はどうも迷惑をおかけしました」

「お前、ほんっと可愛くないな。つまんない弟だよ」

「だって、つまんない兄貴の弟なんだからしょうがないだろ」
そう呟き、真っ直ぐ自分の部屋に行こうとした俺を兄貴の言葉が止める。

「いや、待て。捨ててない……………気がする……………」

「はっ、なんだよそれ」

「捨ててない、捨ててなかった。ほら、あいつだよ、あいつ。あいつに渡したんだよ」

「あいつって誰だよ」

「お前の友だちだよ！ゴミ捨て場で会ったんだよ……………えーっと、確か……………」

そのとき、俺の頭にあのボロボロのスニーカーが浮かんだ。

「もしかして……………誠？」

俺の言葉に難しい顔をしていた兄貴の顔が一気に晴れやかになる。

「そうだよ、誠！誠に渡した！あいつ、ちようどそこにいてさ。それで走るって言うからさ」

「あの、白いスニーカーだよな？」

「ああ。白い以外の特徴はなかったスニーカーだったな、あれは」

思い出せてスッキリしたせい、兄貴は興奮気味に言葉を続けた。

「しかもさ、笑えることにお前の代役でアンカー走る予定だった子が前日に熱出しちゃってさ、

結局お前の代わりにアンカー走ったの誠だぞ。俺、あの日同級生の奴らと運動会ちよつと見に行ったんだよ」

「男と男の約束……」

俺はいつだか誠が言った言葉を思い出した。

「お前、今までそんなことも知らなかったの？」
その何気ない兄貴の言葉に「知らなかったよ」なんて強く言い返す
こともできずに俺は立ち尽くした。

＊

翌日の午前10時。なんとなく昨日と同じ時間にまたいつもの場所
にやって来た。

緑のネットの向こうにゆっくりと流れる川が見え、地面に落ちた枯
葉が風に飛ばされている光景の中に
カバンの上に頭を乗せ、ベンチに無防備に寝転ぶ少年の姿はあった。

「誠、邪魔。俺も座るから起きろ」

俺が来たことに驚く様子もなく、誠はむくっと起き上がった。

「なんだよ、せっかく一人で寝ようと思ったのに」

「お前はバカか。わざわざ学ラン着てここで寝るぐらいだったら家で寝ろよ。風邪ひくぞ」

そう言いながら俺は誠の通学鞆をどけて座った。

「家はみんな大掃除してんだよ。掃除機の方が僕の睡眠をさまたげるの」

「あつ、そ。それはそれはお気の毒に」

そんな冷たい言い方に誠は一瞬俺を睨みつけたが、何も言わず空を見上げた。

俺も缶ジュースを飲みながら誠と同じように空を見上げる。

眼鏡のレンズが汚れているせいか、いつもよりも景色が見にくい。

「確実に近づいてるな」

「なににだよ」

遼平の呟きに誠が不思議そうな顔をして答える。

「死へのカウントダウンが」

「え、お前正気か！？死ぬのか？」

つい最近聞いた言葉とまったく同じ言葉を遼平は聞いた気がした。

「ちげーよ。俺もいつかは死ぬんだなーとか考えるわけだよ、空見
てると。ま、お前に言っても分かんない……」

「つまりはアレか？大人に近づいてるってことか？」

「んーまあ……そうかな」

俺は誠の理解力の早さを誉めようと思ったが、調子に乗ると思った
のでただ頷くだけにした。

「俺は天国とか地獄って信じねーんだよな」

誠の口から出てきた突然の言葉に遼平は驚いた。

「俺はね、天国なんてねーと思うわけだよ、遼平ちゃん」

「……キモチワル。ちゃん付けるな」

「おい、キモチワルイってなんだよ！まあさ、仮に天国があったと

しても、空じゃないよ」

「じゃ、どこにあんの？」

そんな遼平の疑問に誠は空を見上げたまま語り始めた。

「お前とか親とか兄弟とか、優しいだけが長所の担任の岡田とか、俺が心から尊敬してる古典の岸先生とか、いつも秋になると柿くれる近所の平松のじいちゃんとかにさ、”あーあいつはバカだったなー”とだけでもいいから、覚えてて欲しいんだよ。そういう人たちの記憶にいれたらそこが天国だと思うわけ」

「そーいやさ、ジプシーたちはな、死んだ人を今までいなかったことにするんだ」

いつになく真面目な顔をしている誠を横目に遼平は呟いた。

「ジプシー？んーなんか聞いたことがある気がするな」

「俺は嫌だよ、そんなのは。つまんない人間はつまんない人生を精一杯生きたってことを誰かに覚えてて欲しいよ。生きてたことをなかったことにされるなんてあまりにも寂しいじゃん」

「そうだな・・・・・・・・いやーだけどお前はつまんない人生なんか歩んでねえよ」

「歩んでんよ」

「いいや、歩んでねえ。お前には大した未来が待ってるよ」

「なんだよ、それ・・・・・・・・」

「俺のカン、っていうか根拠のない自信」

そう言っただけは俺の背中を右手で思い切り叩いた。バカの馬鹿力とは本当にこのことだ。

だけどその痛みと共に俺の頭の中からつまらないものがスツキリと消えていった気がした。

「お前、成長したな」

「まあな」

「人が一生懸命話してんのにボーツとしてたりするときあるのはそういうこと考えてたんだな」

「そんなことしたか？お前はあれだな、言いにくい話するとき眼鏡のフレーム触るよな」

誠は「いつもこの辺り触ってる」と言いながら、俺の眼鏡のフレームを指した。

「えっ、やってる覚えてねえよ、そんなこと」

「じゃあ、無意識のうちにやってんだな。怖いねー怖いねー無意識ってのは」

「しまーあれだな、遼平ちゃん」

「……お前、いい加減にしろ」

「あーごめんごめん。いやね、さっきあの男の子に会ったんですよ」
「へー」

遼平の頭にクマのぬいぐるみを持った男の子が浮かぶ。

「あのお兄ちゃん、よく笑うようになったね、って言ってた」

「……俺のことか」

「きっと頭のいいお兄ちゃんがおもしろいからだね、って」

その言葉に、遼平は思わず誠を睨みつけた。

「けどあれだな。中学のときから変わっていないのは奇跡だな」
遼平が空を見上げながら呟く。

「なにがだよ」

誠が不思議そうな顔をしながら遼平を見た。

「ほんっと変わってないなんておかしいよな」
「だから、何が？」

「…………お前の足の大きさだよ」
眼鏡のフレームを触りながら言ったその遼平の言葉に、誠は思わず腹を抱えて笑った。

＊

「誠、お前だったらどうする」

「んっ？」

「国語の宿題なんだけどさ。お前だったら、未来の自分の子どもになんて言う？」

その遼平の言葉に唸り声を上げながら誠は考え始めた。

「んーとりあえず…………俺の元に生まれて来ちゃってごめんなさい、だな」

「ああ…………そうだな。お前はまずそれだな」

「おい、そこツツコミ入れるとこだろ！」

誠が右ヒジを俺の二の腕辺りに軽くぶつけてきた。
そのほのかに感じた痛みと同時に俺の頭にある光景が浮かぶ。

数学の二次関数を解くことよりも簡単に浮かんできた、大勢の人を
目の前に笑いをとる誠の姿。
そうだ、こいつはきつと・・・・・・・・。

「誠・・・・・・・・俺たち、漫才師にでもなるか」
「はあっ？」

誠にツツコミを入れられるのは俺だけかも知れない、そんな根拠の
ない自信がわいてきて、
驚いて口が開いたままの誠を横目に俺はまた一人笑い続けた。

ふと頭に浮かんだ真っ白な原稿用紙。
提出期限は今月末。まだ期限まで二週間はある。だけど一週間前
には提出しよう。

だって、俺は誠と違って真面目だから。

僕の友だちは人に笑顔を作ることが得意な奴でした。
だから君もそんな友だちを作ってください。

眼鏡を外し、いつものように眼鏡ケースから取り出した布でレンズを拭く。
昨日「いつもよりイイの買ってきてあげたわ」と母に言われながら受け取った新しい眼鏡拭きは、
誠が履いているスニーカーがまだ新しかった頃と同じ真っ白な色をしていた。

丹念にレンズを拭いたあと眼鏡をかけると、やけに景色がよく見える気がした。

緑のネットの向こうに見える花の色も、山奥に少しだけ見える富士山も、空に浮かぶ小さな雲の動きも……………。

「誠！」

「……………なんだよ！」

突然大きな声を出した俺を迷惑そうな目で誠を見た。

「お前のスニーカー、ほんっとボロボロだな」

そう言って俺はさっきのお返しとばかりに誠の背中を勢いよく叩いた。

誠の苦痛を浮かべる表情を見ながら、缶ジュースを一気に飲み干す。

今まで見えなかった誠のボロボロのスニーカーに空いている無数の小さな穴。

久し振りに会った友人が俺より成長していたという事実。

そのことを考えたら、俺はなんだかむしろように笑えてきた。

なあ、誠。

お前の履いてるスニーカーは、笑顔を作るスニーカーだったのかも知れないな。

>
J
<

第3話「ラフメイク・スニーカー」(後書き)

「ラフメイク・スニーカー」を読んで下さった皆さん、本当にありがとうございました。

この話はある曲と、ある漫才師さんの特集番組を見たときに思いついたものです。

遼平と誠の会話を書いていて、やっぱり人と人との会話は書いていて一番楽しいなあと思えました。

そして今後の課題はやはり表現力です。背景描写がまったく上手くできないのでなんとかしないと、と。

いや、それ以外にも課題は山積みなのですが特に。本当にいつになったら成長できるのか……頑張ります。

小和「<http://houka5.com/passport/>

special thanks!!!

bump of chicken”ラフ・メイカー” and tutorial……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1764d/>

ラフメイク・スニーカー

2011年1月11日16時02分発行